

並び居るブルーインクは濃く淡く「深海」の名の小瓶を選ぶ 武富純一

「深海」が謎めいた雰囲気をかもしだして、魅力的である。が、一読しただけでは意味が分からない読者が多いと思う。「深海」はじつはパイロットの万年筆用インクの銘柄である。万年筆愛好家ならではの作。万年筆好きなら分かるし、ネットで調べればすぐ分かる。この程度の商品名は採用してもいいだろう。

「玄関は0.1ミリシーベルト」とのみ告げて係員去る 天野明

福島に住む作者が、原発事故五年半後の今をうたう一連中の一首。解説や批評、思いや感想を一切排除して、その場の事実だけを切り取って切っ先の鋭い一首にした。○・一ミリシーベルトが人体にどう影響があるのかわからないのは、読者が調べればいい。

つくづくと見る絵暦の入梅は荷を奪い去る盗っ人の 中西由起子

江戸時代の絵暦の江戸風のしやれをうまく一首にうたいこんだ手腕と取材感覚のよさ。ふり仮名のふり方にも一工夫してある。

父の日に亡き父の作観劇す小学生の自分と共に

矢代朝子

劇作家だった父上の作になる演劇である。「父」という語のリフレインが、意味的にも音楽的にも軽い明るさをもたらして、子供時代の思い出にふさわしい。

短歌の現在

No.426 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

子の一生とわれの一生と重なる部分のありて濃し
その部分 佐藤モ二カ

母親とその子供の関係を、クリアに表現する。子育て中の「今」を図表に描いたような、映像を意識した表現に注目した。

出発は六人なりきそのうちの四人健在の宮崎歌会 伊藤一彦

「心の花宮崎歌会」三百回の記念会を迎えての感慨をうたう七首中の一首。次にかかげる湘南歌会の八城作とともに、歌会の歴史を浮かび上がらせ、記念の意味を確認するかたちの記念的な作。

六十年を振り返らむかこの座敷にそよぎぬにけむ和服の人ら 八城スナホ

「心の花湘南歌会」八百回記念歌会の感慨をうたう五首中の作。前の伊藤作と同様のモチーフだが、女性会員の多さを意識的に表現して、特色を出している。

学生の頃の足つき衿を立て虎が涙を君は来るなり 雪野真菰

「虎が涙」という古い季語を使って、男友だちのイメージをうまく描き出した一首。「虎が涙」は、旧暦五月二十八日のこと。この日は曾我兄弟のあだ討ちの日で、必ず雨が降るとされ、「虎が涙」「虎が雨」と呼ばれている。この語を採用することで、「君」に「虎」のイメージを重ねている。

懇ろな手紙の主の酷薄の心も知れり元妻われは